

環境と建築

第4回

建築物や構築物は、その計画から設計、建設、運用、改修、廃棄に至るまで、自然環境や地域の土地柄、風土を常に意識しつつ、地域住民や利用者に対するサービスを担っています。

本シリーズでは、道内の建築物や構築物が環境をどのように意識し、どのような手法でサービスを行い、どのように利用されているかをキーワードで紹介します。

「また来ます。心のふるさと。」

アルテピアッツァ美唄

建築家 圓山 彬雄

「大理石がいっぱいあってびっくりした。川でいっぱい遊んで楽しかった。また来ます。」—I.H

今から20年ほど前に、美唄市の廃校になった小学校の体育館を彫刻家安田侃やすだかんのアトリエにする話があった。そのことをきっかけに、地域再生プロジェクトとしての芸術広場・アルテピアッツァ美唄がはじまり、今では裏山も含めて約7,000坪の敷地のなかに改修された体育館と木造校舎があり、その屋内外に安田侃の彫刻40余りが置かれている。その活動の中心的な役割を果たしてきた彫刻家安田侃は、ふりかえって言う。

—60年前、わたしは鉄道員の息子として美唄駅前で生まれた。毎日、遊び場に使っていた駅の引込み線は、山から下ろされる膨大な量の石炭を本州に送るための貨車がひしめき、いつも殺気立っていた。石炭の臭い、蒸気機関車の雄たけび、線路の熱さ、震えと緊張感をいまだに身体どこかでおぼえている。

夜になって鉄道官舎の窓から見える炭鉱の山は、炭住の「あかり」がダイヤモンドかと思われるほど輝き、山々を美しく覆い尽くしていた。とくに冬の白い雪に映える「あかり」は一段とあざやかだった。—という。

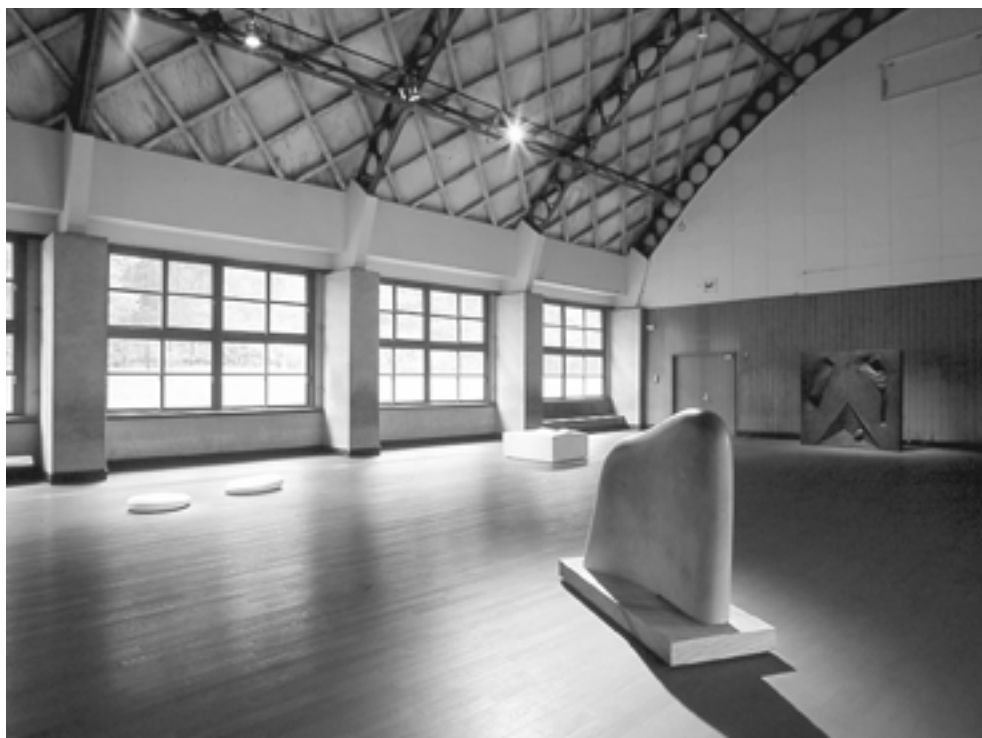
彼は、25歳でイタリーに渡る。35歳の時に炭鉱犠牲者の魂のための「炭山の碑」を美唄に創った

ことが縁で、20年前、40歳の時に廃校にされたままの栄小学校の体育館をアトリエに使ってみたいかと声をかけられる。

—体育館の周りは、雑草と高いやぶでおおわれていたが、内部は戦前の丸屋根木造構造で、どこか人をひきつける素朴さを残していた。

しかし、床は腐りはじめ、天井からは雨漏りがする。このままにしておけば、ほかの建物と同じように朽ちていくように見えた。—という。

体育館を改修してアトリエにすると、美唄とイタリアを幾度となく往復することになるが、寒そうな古い校舎の一部を借りていた幼稚園に毎日通ってくる子供たち、体育館に置かれた彫刻をコソッとのおぞきに来る好奇心の強い子供たち、激しい吹雪でもめげずに通ってくる元気な子供たちの姿を見て、この子供たちが無垢な心で遊びまわり、身体のすべてをぶつけて楽しめる広場を造ろうと思ったのが、アルテピアッツァ美唄をつくる火種となった。という。しかし、ここには都会の公園にある遊具は、ひとつもない。体育館に置かれた彫刻を見た子供たちが「白くなった人間が白い布をかぶせられているよー。」「女の人が、真っ白くなって死んでるー。」と騒ぎながらも、彫刻に魅力を感じていることを知った安田侃は、子供に気に入られように作られた遊具をここに置くことはなかった。彫刻とそれを取りかこむ十分



な空間があれば、子供たちは自分たちで遊びを見つけだしていく。という確信をもって、彫刻や樹木を配置し、池や流れをつくり、丘をつくってきた。そして子供たちの楽しげな声が聞こえるところになった。

あるゆる産業のエネルギー源が、石炭から石油へと変わり、次々と炭鉱が閉山されていき、過疎化と財政難の問題が大きくなるなかではじめられた地域再生プロジェクトは大変であった。美唄市と市民有志と安田侃には惜しめない献身を求めつづけてきたし、これからもまだつづくに違いない。しかし、ここに炭鉱の山のあったことを、そこに多くの人たちが居たことを、そしてそこで暮らしていた人たちの思いを残そうという堅い信念を持って、ゆっくりだが、ひとつずつ積みかさねられてきた年月が、安易には手に入らない重みと味わいをアルテピアッツァ美唄に与えてくれた。それまでに捧げられてきた献身へのごほうびのように。

「不思議な石に出会いました。大理石って冷たい感じがして苦手だったのですが、思わず抱きついてしまうくらい気持ちのよいものだと知りました。昭和30年代を思い起こさせる古い校舎と、すみとおったオブジェが、空気を別のものにしてくれる。今度は晩秋に来てみたい。」—S.U

イタリアから運ばれてきた彫刻を前にして、安田侃は自問する。

—この広場に一点一点とイタリアから彫刻が運ばれてくる。彫刻が大地におかれる瞬間、ここアルテピアッツァの空気を吸うことができるかどうか、この彫刻がこの地で生きていけるかどうかの分かれ目になるような気がしてドキドキする。

彫刻たちが子供たちとなか良く遊べるのか、厳しい吹雪のなかで毅然と立ち続けることができるかどうか。不安と暗中模索の連続であった。—という。

この安田侃の言葉のなかには、二十世紀末以降、閉塞状態におちいった建築の世界への警告がひそんでいる。自然のなかの限定された土地に、ひとつの彫刻を置くにあたっての細心さが、ここにはある。呼吸するはずのない石の彫刻に対して、その置かれるところの空気を吸うことができるかという問いを持ち、さもなければこの白く冷たい大理石の彫刻が生きていけないという細心さに感銘を受ける。積雪寒冷の美唄という厳しい自然環境だけを問題にするだけではなく、アルテピアッツァ美唄の敷地のどこに置くのか、すでにある彫刻やその他のオブジェとの間合いについても、同じような繊細さで彫刻を据えてきたに違いない。それぞれの彫刻は、それぞれに必要なとする空気量、空間が異なる。それらの組み合わせと重なり



合いの具合によって創りだされる間合いは、新しい次元の独自の魅力をもつ空間となって、心を動かす。アルテピアッツァ美唄には、今までに見たことのない質、心安らぐテストを持った空間が満ちている。そこに安田侃の巧みな空間操作の魔術を見ることができる。

8年前に体育館と校舎の間に白い大理石を使って川と池をつくり、そこにふたつの彫刻を据えた。これによってアルテピアッツァ美唄に中心となる核が生まれた。体育館と校舎にはさまれた広がり、どちらかというに残り、余りという印象の空間であったが、この白い大理石の造形群が置かれたことによって、ばらばらに見えた二つの古い体育館と木造校舎がつながって見えて、白い大理石群を抱きかかえる空間が生まれた。その空間のなかに門型の二つの白い清廉な彫刻を対峙させているが、あたかも、その緊張感を和らげるように丸い池と漣さざなみを立てる流れを添えて、優しさをふくんだ絶妙な、そして繊細な均衡を造りだしている。

「雪降る夜に、ひとり空を見つめているような心地になります。何か大きな懐かしいものに出会った気がして立ち去りがたいのです。」—滝川 M.M

このアルテピアッツァ美唄は、小さな山のせまる川筋の山間にあるが、安田侃の深い思いを持つ

て、あせらず時間をかけ、少しずつ積みあげてきた時間の重さが、自然に残されたままの樹木が生み出す野放図な空気に、人の思いをしみ込ませて、しっとりと落ち着いた空間に仕上げている。新しいものにはない「時間を内包する空間」が創りだされている。アルテピアッツァ美唄では、その時間を内包する空間を味わうことが大切であるが、ここでは、誰もが、この環境を知らず知らずのうちに身体で理解してしまう。見るというより聞く、目を閉じて身体で聞く。ここの空気を身体全体で感じるができる人は、素直さに出会うことができる。素直な心になれるところであり、その心を離れた素直さは、さらにこの広場いっばいに広がり、山間に流れる風とまじり合って、まわりの山の樹間を抜けて、青い空に拡散していくように思える。ここには、古ぼけた建物と彫刻と築山と樹木と池という物が、どれもが必要で十分なそして繊細で微妙な均衡の間合いで置かれている。置かれているオブジェクトよりも、それらの間に生まれた絶妙な空気、絶妙な空間が主役となって、心にじかに訴えかけてくる質の高い空間芸術となっている。空間芸術をその本質としている建築にたずさわる者に、その求めるべき空間のつくり方を教えていると思うほど見事である。この持続する熱い思いによって醸成、創生された心にしみるような空間に、多くの人は感動した。そして平



成14年に「村野藤吾賞」「井上靖文化賞」を受賞することとなる。

「第15回村野藤吾賞」は、本来、優れた建築に与えられる賞であるにもかかわらず、アルテピアッツァ美唄が受賞した。この賞は、日本の現代建築に功績を残した村野藤吾を記念して、ここ三年の間に建てられた数多くの建築のなかで、見る人に深い感銘を与えた建築作品に対して毎年、一作品に与えられる。アルテピアッツァ美唄が受賞した近くの三年間にできた建築のなかに、アルテピアッツァ美唄よりも人を深く感銘させるものが一つもなかったのです。莫大なお金をかけた新しい建築技術や手法を用いて斬新な表現に挑戦した大建築を押しつけて、北海道の小さな町といえる美唄市で、思いと心と時間をかけて少しずつ造ってきたアルテピアッツァ美唄—古ぼけた体育館と木造校舎の建つ何かしら懐かしさをおぼえる広場が、そこを訪れる人に深い感銘を与えてこの賞を得た。

自らは近代的で繊細な建築を造る審査員の建築家池原義郎は、審査理由の中で—「心の視座」に建つこの再生のプロジェクトは、人々に深い共感を与え、そこに時代への一つの重要な示唆があるように思う。—と述べている。建築という行為のなかには、建築単体を美しくつくることに限らず、その置かれた場を美しくつくることが大

切であり、建築をつくるものにとって忘れられていた「場」をつくることに心を配ることを示唆している。また、ここでは、廃校になった校舎や体育館などの建築にとどまらず、彫刻の配置やそれを活かすための築山を含めた造成や造園のすべてを、安田侃の感性でまとめ上げている。そのことによって、芸術が生活の身近に寄りそい、周囲の環境を取り込みながら、共存させながら芸術環境をつくり出していることが、高い評価になった。

「一つ一つに手を触れて、それぞれの心を胸に痛く感じ、涙があふれた。沈む心が浮き上がり、安らかな気持ちで帰ります。ありがとう。」

—岩見沢 M.M

アルテピアッツァ美唄には、そこに来たことや感じたことを書くノートが、木造校舎二階の窓際においてある。そこは、白い大理石の門型の彫刻と丸い池と流れが一番良く見えるところだが、緑の芝生に映える白い彫刻群を見るうちに、しみじみと感じてくることを書きたくなるに違いない。

「今日は建築の勉強をしている彼に連れられてきました。ここはとても暖かいと思います。作品に触れている人を含めて作品だ、ということも教えてもらいました。今日、私も作品の一部になりま



した。」—札幌 RUI

「課外授業でデッサンに来ました。ただひたすら涙が出ました。感動をありがとう。また来る日まで」—N

「静の中に動を見出す。究極の引き算を感じることができました。」—札幌 Y.O

「彫刻とたわむれている子どもたちがいて、はじめて足りないものが補われた気がした。丸い池の中心で手を広げて立ってみて、空間と一体になった気がした。日が差してきて公園が輝き始めた。余分な空間こそ必要な空間だった。この公園が生きている公園でよかった。」—HIROAKI

「静かでもとてもすばらしい所ですね。私達は来月、結婚するんです。ここのような、やすらぎのある家庭にしたいです。子供が産まれたら、親子3人で絶対また来ます。」

大人たちも感動して書いています。安田侃の彫刻というより、安田侃のつくった芸術空間に驚き、感激しています。誰もが、また来たい！という思いを書いています。ここに感想を書いている人の何倍もの人たちが、感動して帰っているに違いありません。この芸術広場は、「また、来ます。」という人たちのためになくすことができません。心安らぐ「心のふるさと」として存在し続けなければなりません。

アルテピアッツァ美唄を守るNPOが2005年にできました。これほどまでの感動を覚える外部空間は、世界のどこにもありません。写真やビデオではなく、そよぐ風を感じ、香りを嗅ぎ、空間を体験して、はじめてアルテピアッツァ美唄の真髄に触れることができます。そのためにNPOは、いろいろな催しを企画しながら、より多くの人に体感してもらうことを考えて動き始めています。

一度もアルテピアッツァ美唄に来たことのない人は、今日の日曜日に来てください。

そして新緑の春にもう一度美しいアルテピアッツァ美唄に、また来てください。

参考図書

「また来ます。」

安田侃の彫刻広場 アルテピアッツァ美唄」（求龍堂）

「安田侃の芸術広場 アルテピアッツァ美唄」（北海道新聞社）

「安田侃、魂の彫刻家」彩草じん子著（集英社）

写真：並木 博夫氏

profile

圓山 彬雄 まるやま よしお

1942年新潟生まれ。'66年北海道大学大学院修士課程終了後、室蘭工業大学講師、上遠野建築事務所を経て、'80年(株)アープ建築研究所創設・主宰、現在に至る。札幌都市景観賞、北海道赤レンガ建築賞、日本建築学会作品選奨、公共建築賞、札幌芸術賞などを受賞。現在(株)日本建築家協会北海道支部長。
